

熊本大学文学部附属
永青文庫研究センター

年 報

第1号

2010

熊本大学文学部附属永青文庫研究センター

序 文

熊本大学附属図書館に寄託されている細川家文書の目録を作成するための、永青文庫研究センターを文学部に創設して新しい研究拠点にしないかとの提案が、当時、崎元達郎学長から菅原勝彦理事・副学長を通して私のところに回ってきたのが、平成20年10月でした。センター運営のための寄付金は県庁を通して肥後銀行から頂けるということでした。しかしながらそこには大きな問題がありました。それは「期限が5年でその後はない」、という点でした。学長は私の返事が一日も早く欲しいということでしたが、私は即答を避け、教授会で承認を得るまで待つて欲しいとお願いしました。

文学部は任期付教員を採用することに、これまでも反対を表明してきました。今後もその姿勢は貫き通す覚悟でいますが、その理念を曲げてまで、はたして永青文庫研究センターを文学部内に設置する意義があるのか、それが問題だったのです。もうひとつの問題もありました。それは永青文庫資料群の有する価値の重さについてでした。

ご存知のように、永青文庫資料群は熊本の宝であると同時に日本の宝でもあります。その膨大な資料が、我が熊本大学の図書館に寄託され、これまでその資料を基に、本学の歴史学研究者たちが中心となって、極めて価値ある研究を行い、その成果を公表してきました。このような研究を今後、更に充実発展させ、日本国中に永青文庫資料群の価値を知らしめることは、私たち文学部のみならず、熊本大学全体の義務であるとの総意を得る必要がありました。

センターに任期付教員を置くことに対しては、文学部の理念を通すため、このセンターを文学部附属とし、文学部内部の教員を専任及び兼任として配置することで、この問題は教授会で承認されました。その後は平成21年3月まで、設置準備委員会を何度も開催し人事やセンターの運営方針等の検討を行い、ようやく平成21年4月に文学部附属永青文庫研究センターが誕生いたしました。ここに至るまでには学内外に極めて強力な援助がありました。その方々の御支援に応えるためにも、5年とはいわず、10年、いや30年以上も存続させる責務がある、と本研究センターに携わる全員が気持ちを新たにしているところです。

最後になりましたが、今後とも末永く文学部附属永青文庫研究センターを御支援くださるよう、関係各位に心より御願ひ申し上げます。

熊本大学文学部長

大 熊 薫

目 次

序文	1
1. 研究センター設置の経緯と年間の活動	4
2. 研究センター関連規則と組織	16
3. 年間活動報告	20
4. 講演会の記録	25
1) 熊本大学文学部附属永青文庫研究センター設立記念講演会 センター長挨拶	25
2) 熊本大学文学部附属永青文庫研究センター設立記念講演会 熊本大学寄託永青文庫資料の構成と歴史的 position (要旨)	27
3) 熊本大学文学部附属永青文庫研究センター設立記念講演会 熊本藩の地域行政と日本近代 (要旨)	29
4) 第16回東京リエゾン・オフィス・イブニングセミナー 永青文庫の文学資料 (要旨)	30
5) 第4回永青文庫セミナー 御花畑屋敷 (肥後藩国許屋敷) について (要旨)	32
5. 研究員の年間活動	34

1. センター設置の経緯と年間の活動

熊本大学文学部附属永青文庫研究センター設置までの経緯

日付	打合せ・報告内容・講演会等
平成20年10月8日	①「永青文庫」研究に係る寄附金受入について ②文学部附属研究センターの設置について
平成20年10月15日	①文学部附属永青文庫研究センター（仮称）の設置構想（案）について ②永青文庫研究センター（仮称）設置準備委員会の設置について
平成20年11月21日	①永青文庫（古文書）調査案（熊本県からの資料） ②センターの名称について ③永青文庫研究センター（仮称）の事業についての考え方 ④センター長及び副センター長の選出
平成20年11月26日	永青文庫研究センター（仮称）事業についての考え方について
平成20年12月10日	研究事業に関する要望事項 1) 覚帳等の行政記録の研究 2) 展覧会等、社会に向けた活動 3) 国指定を前提とした永青文庫文書の目録作成
平成20年12月12日	①センター長の選出 ②教員人事について ③センター設置場所について ④熊本県との交渉結果について
平成21年1月14日	文学部附属永青文庫研究センター（仮称）設置構想（案）について
平成21年1月15日	永青文庫研究センター研究経費の受入れについて
平成21年1月20日	永青文庫研究センター設置構想（案）について
平成21年1月27日	永青文庫研究センター（仮称）の設置について
平成21年2月5日	①永青文庫研究センターの施設（スペースの有効活用）関係 ②備品・設備関係経費
平成21年2月9日	①永青文庫の古文書調査事業（委託事業）について ②受託研究費に関する事務手続について ③永青文庫常設展示振興基金活用委員会設置要項（案）について
平成21年2月12日	永青文庫研究センター（仮称）の設置について
平成21年2月19日	①永青文庫研究センター運営・事業・スタッフ ②国文学研究資料館と熊本大学文学部との研究連携に関する協定書等 ③永青文庫研究センター設置計画書（案） ④永青文庫研究センター規則（案）

日付	打合せ・報告内容・講演会等
平成21年2月26日	永青文庫研究センター（仮称）の設置について
平成21年2月27日	①永青文庫研究センターのスタッフ決定 ②永青文庫研究センター規則（案）
平成21年3月2日	永青文庫研究センター（仮称）の設置について
平成21年3月12日	センターホームページの作成・開設関係
平成21年3月13日	①永青文庫研究センター規則（案） ②永青文庫研究センター設置計画書（案）
平成21年3月19日	永青文庫研究センター設置構想・事業概要報告
平成21年3月20日	財団法人永青文庫への訪問 ①「永青文庫研究センター」の基本構想・活動内容等 ②「十九世紀熊本藩人民評価・褒賞記録「町在」解析目録」の刊行等を報告
平成21年3月25日	学長記者懇談会「熊本大学文学部附属永青文庫研究センター」の設置を発表

平成21年度の活動

日付	打合せ・報告内容・講演会等	打合せ先等
平成21年4月1日	「熊本大学文学部附属永世文庫研究センター」の設置 ・センター長（甲元眞之教授） ・副センター長（稲葉継陽准教授） ・北野 隆特任教授 ・川口恭子特任教授 ・高濱州賀子客員准教授 ・徳岡 涼客員准教授 の発令	
平成21年4月3日	「熊本大学文学部附属永青文庫研究センター」看板上掲式 (谷口 功学長) 「永青文庫研究センターの設置を契機として、世界的にも価値のある史資料の研究を推進し、その研究成果を社会に順次発信しつつ、人文社会科学系発のグローバル COE を目指して努力していただきたい。そのために、大学としても可能な限り支援を行う。」との祝辞。 (大熊 薫文学部長) 「学長、財団法人永青文庫及び熊本県の関係者の物心両面の支えによりセンターの設置が実現した。」との謝辞。 (甲元眞之センター長) 「永青文庫史資料群の国指定を視野に入れた基礎目録の作成等、今後の研究活動の展開」についての抱負。	谷口学長 大熊文学部長 甲元 吉村 森 稲葉 高橋隆雄 (社会文化科学研究科) 入口紀男(附属図書館) など
平成21年4月6日	① 永青文庫常設展示振興基金活用委員会について	熊本県庁文化課
平成21年4月7日	第1回スタッフミーティング	センタースタッフ
平成21年4月8日	パンフレット打ち合わせ	シモダ印刷 甲元
平成21年4月15日	パンフレット用写真撮影	シモダ印刷 稲葉
平成21年4月17日	熊本経済取材	熊本経済 稲葉

日付	打合せ・報告内容・講演会等	打合せ先等
	受託研究費について	熊本県文化課 熊本県立美術館 センタースタッフ
平成21年4月20日	第2回スタッフミーティング	センタースタッフ
平成21年4月23日	①委員会の仕組みについて ②今後の運営方針について	第一回永青文庫常設展示 振興基金活用委員会
平成21年5月1日	①第一回永青文庫常設展示振興基金活用委員会報告について ②人事について	第二回永青文庫研究センター運営委員会
平成21年5月8日	研究センター設立記念講演等の宣伝について	石井窓呂(永青文庫友の会) 稲葉
平成21年5月11日	第3回スタッフミーティング イブニングセミナーについて	センタースタッフ 吉丸良治(永青文庫) 稲葉
平成21年5月15日	柳川古文書館視察	稲葉
平成21年5月18日	第4回スタッフミーティング	センタースタッフ
平成21年5月19日	K A B取材	稲葉
平成21年5月25日	第5回スタッフミーティング	センタースタッフ
平成21年5月26日	N H K熊本取材	安田(N H K熊本) 稲葉
平成21年5月30日	熊本大学文学部附属永青文庫研究センター設立記念講演会の開催 (谷口功学長) 「永青文庫研究センターの設置を契機として、世界的にも価値のある永青文庫史資料の研究を推進し、その研究成果を社会に発信し、人文社会科学系初のグローバル COE を目指し、努力してほしい。」との挨拶。 (甲元眞之センター長) 「永青文庫史資料群の国指定を視野に入れた基礎目録の作成等、今後の研究活動について」の抱負。 ○来賓祝辞 ①財団法人永青文庫理事長代理 細川佳代子氏 ②熊本県教育長 山本隆生氏	熊本大学工学部百周年記念館 谷口学長 大熊文学部長 甲元 吉村 稲葉 一般参加者：約250名

日付	打合せ・報告内容・講演会等	打合せ先等
	○講演内容 ①「細川家と対外貿易」 加藤榮一氏（元東京大学史料編纂所教授、新潟産業大学名誉教授、日蘭学会理事） 「細川家文書は、海外貿易や流通の研究者にも大変貴重な資料として注目されている。研究の進展と新たな情報を期待したい。」 ②「熊本大学寄託永青文庫資料の構成と歴史的な位置」 熊本大学文学部 稲葉継陽准教授 ③「熊本藩の地域行政と日本近代」 熊本大学文学部 吉村豊雄教授	
平成21年6月1日	第6回スタッフミーティング	センタースタッフ
平成21年6月2日	特別展「細川家の至宝－珠玉の永青文庫コレクション」展示資料について K A Bのニュース枠にて、永青文庫とセンターの紹介特集を放送	東京国立博物館研究員 徳岡 稲葉
平成21年6月4日	「第16回熊本大学東京リエゾンオフィスイブニングセミナー・熊本大学文学部創立30周年記念事業・文学部附属永青文庫研究センター設置記念事業『永青文庫史資料の世界』」の開催 ○来賓 細川 護熙 財団法人永青文庫理事長 吉丸 良治 財団法人永青文庫常務理事（山村 研一副学長） 永青文庫研究の展開に対する期待を述べる。（甲元 眞之センター長） 「永青文庫史資料群の重要性に言及し、今後の研究」についての抱負。 ○講演内容 ①「熊本大学寄託永青文庫資料の構成と歴史的な位置」 熊本大学文学部 稲葉継陽准教授 「熊本大学附属図書館寄託永青文庫史資料群の概要と史資料群の貴重さに触れ、今後の総	キャンパス・イノベーションセンター東京（田町） 山村副学長 大熊 甲元 森 稲葉 一般講聴者：70名

日付	打合せ・報告内容・講演会等	打合せ先等
	目録作成をはじめとした事業構想」について講演。 ②「永青文庫の文学資料」 熊本大学大学院社会文化科学研究科 森 正人教授 「源氏物語を例にとり、物語史を大まかにたどりながら永青文庫の文学資料の紹介と永青文庫の文学資料から物語史を概観する。」という2つの視点について講演。 文化庁訪問	甲元 安田（NHK熊本） 稲葉
平成21年6月5日	NHK熊本取材	センタースタッフ
平成21年6月8日	第7回スタッフミーティング	熊本県立美術館
平成21年6月10日	出版用写真撮影	NPO法人行司
平成21年6月12日	打合せ	稲葉
平成21年6月15日	第8回スタッフミーティング	センタースタッフ
平成21年6月22日	第9回スタッフミーティング	センタースタッフ
平成21年6月24日	打合せ	谷口学長 稲葉
平成21年6月26日	①今年度の永青文庫セミナー・貴重資料展示内容について ②平成22年度以降の永青文庫セミナー主催について	熊本大学附属図書館 北野 図書館担当者
平成21年6月29日	熊大通信取材 熊本ルネッサンス取材	熊大通信 熊本ルネッサンス 稲葉
平成21年6月30日	第10回スタッフミーティング 熊本大学附属図書館寄託永青文庫史資料の閲覧	センタースタッフ 永山賀久（文部科学省国立大学法人支援課） 甲元 稲葉 川口
平成21年7月1日	文化庁調査官・永青文庫学芸員との情報交換会 熊本大学附属図書館寄託永青文庫史資料の閲覧	三宅秀和（永青文庫） 甲元 稲葉

日付	打合せ・報告内容・講演会等	打合せ先等
平成21年7月2日	熊本大学附属図書館寄託永青文庫史資料の閲覧	熊本大学各部局長 甲元 川口
平成21年7月3日	熊本大学附属図書館寄託永青文庫史資料の視察・武具甲冑関係文書等調査	文部科学省文化審議会委員、調査官 甲元 川口
平成21年7月6日	第11回スタッフミーティング TKU取材（忠興について）	センタースタッフ TKU 稲葉
平成21年7月7日	熊本大学附属図書館寄託永青文庫史資料の閲覧	熊本大学各部局長 甲元 川口 稲葉
平成21年7月13日 平成21年7月24日	第12回スタッフミーティング 中世文書撮影（附属図書館）	センタースタッフ 稲葉 高濱 有木芳隆（県立美術館） 山田貴司（県立美術館）
平成21年7月27日 平成21年7月28日 ～29日	第13回スタッフミーティング 中世文書撮影（永青文庫（目白））	センタースタッフ 稲葉 有木芳隆（県立美術館） 山田貴司（県立美術館）
平成21年7月30日	谷口学長来訪 ①目録作成に係る経費の援助について ②目録（調査カード）データと映像データをリンクさせた蓄積が可能なソフトの作成について ③文書決裁の効率化について	谷口学長 甲元 稲葉 北村（人文総務） 部局長
平成21年8月3日	第14回スタッフミーティング 永青文庫史資料整備事業基金設立・寄附金受領	センタースタッフ 小堀富夫（RKK） 甲元
平成21年8月6日 ～12日	文学・部門調査	森 徳岡
平成21年8月7日	熊本日日新聞取材	稲葉
平成21年8月10日	第15回スタッフミーティング	センタースタッフ

日付	打合せ・報告内容・講演会等	打合せ先等
平成21年8月12日 ～13日	特別展「細川家の至宝－珠玉の永青文庫コレクション」展示資料について	東京国立博物館学芸員 川口 北野
平成21年8月24日	第16回スタッフミーティング	センタースタッフ
平成21年8月26日	①熊大TV放送公開講座の番組内容について	TKU 稲葉
平成21年8月26日	寄附感謝状の贈呈	小堀富夫（RKK） 大熊・甲元
平成21年9月7日 ～8日	「御印物」撮影	大倉隆二・北本裕子（県立図書館） 高濱・藤本
～11日	歴史文書集中調査 松本先生による講演・指導	松本寿三郎（元熊本大学） 稲葉 川口 学生5名・一般参加者5名 （全10名）
平成21年9月8日	①熊大TV放送公開講座の番組内容について	TKU 稲葉
平成21年9月10日	①幽斎展（仮）について	熊本県立美術館 稲葉
平成21年9月12日	熊本大学附属図書館寄託永青文庫史資料の閲覧	文化審議会文化財分科会 甲元 川口 北村（人文総務） センタースタッフ
平成21年9月14日 平成21年9月15日	第17回スタッフミーティング ①学長裁量経費申請について	谷口学長 甲元 稲葉 北村（人文総務） 高濱
平成21年9月17日	①幽斎展出典品について	山田貴司（県立美術館） 稲葉
平成21年9月18日	①熊大TV放送公開講座「永青文庫は宝の	TKU

日付	打合せ・報告内容・講演会等	打合せ先等
平成21年9月28日	山] (仮) について 第18回スタッフミーティング	稲葉 センタースタッフ
平成21年10月9日	①テレビ放送公開講座「永青文庫は宝の山」(仮) について ①永青文庫セミナーの主催について	T K U 稲葉 附属図書館 稲葉
平成21年10月6日	①「細川幽斎展」出品リストについて	山田貴司 (県立美術館) 稲葉
平成21年10月5日	第19回スタッフミーティング	センタースタッフ伊藤 (文学部)
平成21年10月8日	伊藤准教授より国際研究交流について提案 テレビ放送公開講座向け授業風景撮影	T K U ヒューマン 稲葉
平成21年10月16日	①テレビ放送公開講座について・撮影	T K U ヒューマン 稲葉
平成21年10月19日	第20回スタッフミーティング	センタースタッフ
平成21年10月26日	第21回スタッフミーティング 中世文書校正	センタースタッフ 山田貴司 (県立美術館) 稲葉
平成21年10月30日	科学研究費補助金 基盤研究Aに申請	
平成21年10月31日	第4回永青文庫セミナーの開催 「御花畑屋敷 (肥後藩国許屋敷) について」 永青文庫研究センター 北野隆特任教授	放送大学熊本学習セン ター講義室 北野
平成21年11月1日	「第四回熊本大学ホームカミングデー」にお ける講演会の開催 「永青文庫資料から見る物語史」 熊本大学大学院社会文化科学研究科 森正人教授	一般聴講者：約30名 工学部百周年記念館
平成21年11月2日	テレビ放送公開講座の放送前確認・校正につ いて	T K U ヒューマン 稲葉
平成21年11月5日	①出版に伴う写真掲載の利用料について ②熊本放送文化振興財団からの寄附について	小堀富夫 (熊本放送文化 振興財団) 甲元
平成21年11月9日	第22回スタッフミーティング	センタースタッフ
平成21年11月14日	熊本大学テレビ放送公開講座 「見て聞いて驚く！熊大お宝発見伝」	

日付	打合せ・報告内容・講演会等	打合せ先等
平成21年11月16日	第一回「永青文庫は宝の山～古地図手がか りに肥後路を往く～」放送 第23回スタッフミーティング ①「永青文庫叢書1 細川家文書 中世編」 出版時期・予算等について 寄附目録贈呈式に出席 熊本放送文化振興財団より、永青文庫史料整 備事業として寄附を頂く	センタースタッフ 吉川弘文館 (東京都) 稲葉 (株) 熊本放送 小堀富夫 (熊本放送文化 振興財団) 甲元
平成21年11月30日	第24回スタッフミーティング 熊本大学武夫原会60周年記念講演会開催 「通潤橋・通潤用水にみる幕末日本社会到達 の形態－永青文庫史料と地域史料の可能性を 語る－」 熊本大学文学部 吉村豊雄教授	センタースタッフ 工学部百周年記念館
～12月4日	文学芸芸・部門調査	森 徳岡
平成21年12月2日	①出版校正・原稿について ①来年度以降の出版形式について	山田貴司 (県立美術館) 稲葉 甲元 稲葉 森
平成21年12月5日	文学部創立30周年・永青文庫研究センター設 立記念 熊本大学文学部フォーラムの開催 (文学部長 大熊 薫) 「永青文庫研究センターの設置を契機として、 世界的にも価値のある永青文庫史資料の研究 を推進し、その研究成果を社会に発信してほ しい」との挨拶 ○講演内容 ①『『熊本藩の地域社会と行政』がめざした もの』 熊本大学文学部准教授 三澤純 ②「近世の領主制と行政をめぐって－『熊本 藩の地域社会と行政』に学ぶ」 九州大学教授高野信治	法文棟A1講義室 大熊文学部長 稲葉

日付	打合せ・報告内容・講演会等	打合せ先等
平成21年12月7日	③「熊本藩研究から見えてくる江戸時代の日本」 東北大学教授 平川新 ④総合討論 司会：稲葉継陽 第25回スタッフミーティング 「細川幽斎展」関係出張調査	センタースタッフ 宮内庁書楽部 森
平成21年12月8日 ～9日	「御印物」撮影	山田貴司（県立美術館） 大倉隆二（県立図書館） 高濱 藤本
平成21年12月14日 平成21年12月16日	第26回スタッフミーティング 戦略的経費申請学長事前相談	センタースタッフ 甲元 稲葉 北村（人文総務）
平成21年12月18日	平成22年度戦略的経費申請について	谷口学長 各部長 大熊文学部長 北村（人文総務） 稲葉
平成21年12月21日	第27回スタッフミーティング 運営委員会	センタースタッフ 甲元・稲葉・森・吉村
平成22年1月18日	第28回スタッフミーティング	センタースタッフ
平成22年1月25日	第29回スタッフミーティング	センタースタッフ
平成22年2月1日	第30回スタッフミーティング 御印物撮影	センタースタッフ 大倉隆二（県立図書館） 高濱 藤本
平成22年2月8日	第31回スタッフミーティング	センタースタッフ
平成22年2月15日	第32回スタッフミーティング 永青文庫学芸員三宅氏来訪	センタースタッフ 稲葉
平成21年2月16日 ～19日	第2回古文書集中調査	松本寿三郎（元熊本大学） 一般参加者：15名 学生参加者：3名

日付	打合せ・報告内容・講演会等	打合せ先等
平成22年2月18日	中世文書校正	山田貴司（県立美術館） 稲葉
平成22年2月19日	東京国立博物館展覧会にかかる番組について	NHK、NHKプロモーション担当者 小栗謙一（映画監督） 吉丸良治（永青文庫） 稲葉
平成22年2月22日 平成22年2月25日	第33回スタッフミーティング 熊本日日新聞取材	センタースタッフ 浪床敬子（熊本日日新聞） 稲葉
平成22年3月1日	第34回スタッフミーティング 中国史研究会との共同研究会	センタースタッフ 稲葉 伊藤正彦（熊本大学准教授）、渡辺信一郎（京都府立大学教授）他4名
平成22年3月5日	文学・文芸部門調査	森・徳岡
平成22年3月8日	第35回スタッフミーティング	センタースタッフ
平成22年3月16日	中世文書再校正了	山田貴司（県立美術館） 稲葉
平成22年3月15日 平成22年3月18日	第36回スタッフミーティング 細川家文書の新聞連載につき打ち合わせ	センタースタッフ 熊本日日新聞文化部 浪床記者 藤本記者 稲葉
平成22年3月19日	NHK教育テレビ「日曜美術館」番組制作につき打ち合わせ	（株）美術映像 高橋亘 プロデューサー
平成22年3月29日	第37回スタッフミーティング	センタースタッフ

2. 研究センター関連規則と組織

熊本大学文学部附属永青文庫研究センター規則

(趣旨)

第1条 この規則は、熊本大学学則（平成16年4月1日制定）第8条第2項の規定に基づき、熊本大学文学部附属永青文庫研究センター（以下「センター」という。）に関し必要な事項を定める。

(目的)

第2条 センターは、永青文庫史資料の総合的な研究を通じて当該史資料に立脚した拠点的研究を組織するとともに、文化行政機関等との連携によって地域文化振興に貢献し、もって人文社会科学系分野を中心とした研究及び文化振興の発展に寄与する人材の育成に資することを目的とする。

(業務)

第3条 センターは、次に掲げる業務を行う。

- (1) 永青文庫史資料の総合的研究に関すること。
- (2) 永青文庫史資料による地域文化の研究に関すること。
- (3) 永青文庫史資料による文化創造事業の実施に関すること。
- (4) 永青文庫史資料の研究に関する文化行政機関等との連携及び支援に関すること。
- (5) その他センターの目的を達成するために必要な事項。

(職員)

第4条 センターに、次の職員を置く。

- (1) センター長
- (2) 副センター長
- (3) 専任教員
- (4) 兼務教員
- (5) 非常勤研究員
- (6) 研究支援者
- (7) その他必要な職員

(センター長)

第5条 センター長の選考は、文学部の専任教授及びセンターの特任教授のうちから、文学部教授会（以下「教授会」という。）の議に基づき、学長が行う。

- 2 センター長は、センターの業務を掌理する。
- 3 センター長の任期は、5年とし、再任を妨げない。
- 4 センター長に欠員が生じた場合の補欠のセンター長の任期は、前項の規定にかかわらず、前任者の残任期間とする。

(副センター長)

第6条 副センター長の選考は、センターの専任教員のうちから、センター長の推薦に基づき、

学長が行う。

- 2 副センター長は、センター長の職務を補佐する。
- 3 前条第3項及び第4項の規定は、副センター長に準用する。この場合において、同項中「センター長」とあるのは「副センター長」と読み替えるものとする。

(兼務教員)

第7条 兼務教員は、本学の教員のうちから、センター長の推薦に基づき、学長が任命する。

- 2 センター長は、前項の推薦を行うに当たっては、兼務教員として推薦しようとする者の所属する部局長の同意を得るものとする。
- 3 兼務教員の任期は、5年とし、再任を妨げない。
- 4 兼務教員に欠員が生じた場合の補欠の兼務教員の任期は、前項の規定にかかわらず、前任者の残任期間とする。

(非常勤研究員)

第8条 非常勤研究員は、本学に所属する者以外で、学識経験者をもって充てる。

- 2 非常勤研究員の選考に関し必要な事項は、別に定める。

(研究支援者)

第9条 研究支援者は、専門的史資料の取扱いに習熟した者をもって充てる。

- 2 研究支援者の選考に関し必要な事項は、別に定める。

(委員会の設置)

第10条 センターの管理運営に関する事項を審議するため、熊本大学文学部附属永青文庫研究センター運営委員会（以下「委員会」という。）を置く。

(委員会の組織)

第11条 委員会は、次に掲げる委員をもって組織する。

- (1) センター長
- (2) センターの専任教員
- (3) 文学部長
- (4) 大学院社会文化科学研究科長
- (5) 附属図書館長
- (6) 文学部又は大学院社会文化科学研究科の日本史学及び日本文学並びに歴史学を専門とする教員 各1人
- (7) その他委員長が必要と認めた者 若干人

- 2 前項第6号及び第7号の委員は、文学部長が委嘱する。
- 3 第1項第6号及び第7号の委員の任期は、5年とし、再任を妨げない。
- 4 第1項第6号及び第7号の委員に欠員が生じた場合の補欠の委員の任期は、前項の規定にかかわらず、前任者の残任期間とする。

(委員会の審議事項)

第12条 委員会は、センターに関する次の事項を審議する。

- (1) センターの業務に関すること。
- (2) 予算に関すること。

(3) 非常勤研究員及び研究支援者の選考に関すること。

(4) 施設・設備に関すること。

(5) その他センターの管理運営に関し必要な事項

(委員長)

第13条 委員会に、委員長を置き、センター長をもって充てる。

2 委員長は、委員会を招集し、その議長となる。

3 委員長に事故があるときは、委員長があらかじめ指名する委員がその職務を代行する。

(議事)

第14条 委員会は、委員の3分の2以上が出席しなければ、議事を開き、議決することができない。

2 委員会の議事は、出席した委員の過半数をもって決し、可否同数のときは、議長の決するところによる。

3 議長は、センターに関する重要事項については、教授会に諮るものとする。

(意見の聴取)

第15条 委員長は、必要があるときは、委員以外の者を委員会に出席させ、意見を聴くことができる。

(事務)

第16条 センター及び委員会の事務は、人文社会科学系事務部において処理する。

(雑則)

第17条 この規則に定めるもののほか、センターの運営に関し必要な事項は、センター長が別に定める。

附 則

この規則は、平成21年4月1日から施行する。

熊本大学文学部附属永青文庫研究センター運営委員会

センター長	甲元眞之教授
専任教員	稲葉継陽教授
文学部長	大熊 薫教授
大学院社会文化科学研究科長	高橋隆雄教授
附属図書館長	入口紀男教授
文学部門	森 正人教授
日本史部門	吉村豊雄教授
歴史学部門	丹下 栄教授

熊本大学文学部附属永青文庫研究センター組織

センター長	甲元眞之（文学部教授）
副センター長	稲葉継陽准教授（平成21年10月より教授）
兼務教授	森 正人（社会文化科学研究科教授）
々	吉村豊雄（文学部教授）
特任教授	川口恭子
々	北野 隆
客員准教授	高濱州賀子
々	徳岡 涼
研究支援者	長井 薫
	内山幹生
	藤本豊治（平成22年1月より）
事務補佐員	柴田佳奈

3. 年間活動報告

古文書・古記録部門

川口恭子・稲葉継陽・吉村豊雄・長井勲・内山幹生

1. 調査カードの記入

2009年度は、附属図書館貴重書庫（杉部屋）に収蔵されている中世文書、歴代藩主関係文書、幕藩関係文書等約10,000点について、文化庁調査官の指導を踏まえて確定した調査カードに、データを記入する作業を実施した。対象とした歴史資料の内訳は以下の通りである。

- (1)中世文書群
- (2)「御印物」（初期藩主決済文書）群
- (3)初期藩主書状群
- (4)幕藩関係文書群
- (5)家臣団起請文群
- (6)連枝書状群
- (7)その他

2. カード情報の電子データ化

上記(3)の初期藩主書状群について、調査カードに入力した情報をエクセル・ファイルに入力して電子データ化する作業を実施した。作業は2010年1月から3月まで40日間、約2,000点を完了した。

3. 『永青文庫叢書 細川家文書 中世編』の出版

上記(3)の中世文書群について、東京の財団法人永青文庫に存在する文書も含めて全260点を『永青文庫叢書 細川家文書 中世編』として写真入りで出版するため、文書のデジタル撮影、翻刻、編年作業、解説の執筆等を行った。

なお、本書は2010年4月に吉川弘文館から刊行の予定である。

絵図・地図部門

北野隆・藤本豊治

絵図・地図部門は、2009年4月から4月下旬は調査準備にあて、調査対象のリストアップ、調査カードのフォーマットの作成、目録用リストのフォーマットの作成などを行った。

資料調査は、4月下旬から12月までの約8ヶ月間で、二人一組で50回（日）実施し、約1,000点の資料の書誌データを取り調査カードに記録した。同時に、書誌データの整理と参考のために必要な箇所を写真に撮った。なお、保存状態が著しく悪い素面については、資料保護の観点から、適宜応急処置を施しながら調査を行った。

また、調査カードに記録した基本事項の電子化や、調査資料に関する参考文献と参考資料の収集も随時行った。調査詳細は以下の通りである。

資料調査に入る前に、まず準備として、調査対象のリストアップ、調査カードのフォーマットの作成、目録用リストのフォーマットの作成を行った。調査カードと目録用リストは、どのような資料にも対応できるように一般的普遍性を持たせながらも、下記に記すような永青文庫に収められた絵図・地図・指図の特徴を踏まえた仕様とした。また、調査室の床には閲覧の際、絵図を傷めたり汚したりしないようカーペットを敷き土足禁止とした。さらに、調査道具を揃え、準備が整った4月下旬より史料調査を開始した。

調査は、二人で1点ずつ資料を広げ、架蔵番号（一つの架蔵番号で複数点を収納しているものは、枝番号を付した中性紙の付箋を挟んで一対一対応できるようにした）、保管場所、資料名（外題・内題）、種別、法量、収容形態（折、卷子、折本など）、図像特徴、縮尺（文字・格子野）、作図法（極彩色・淡彩色・墨、貼絵図・書絵図・版画）、方位（文字書・方位盤・四辺内向・四辺外向・四隅内向・四隅内向）、製作年代、保存状況などの書誌データをチェックして、調査カードに記入した。ただし、永青文庫に収められた絵図・地図・指図には、地図（国絵図など）・城絵図・城下図・屋敷図・普請図・御茶屋図・役所図・寺社図・学校図・儀式典札図・景観図・合戦図・領地図など多種多様な史料があるため、それぞれの種別に応じてさらに詳しく調査を行った。

地図・領地図などについては、特に図像特色として、着色・道の区別・導線・山植生・海干潟・家屋描画・町形表現の有無を詳しく調査した。

城絵図・城下図については、特に図像特色として、城（建物描画無・櫓のみ・屋敷と櫓）や町（町割のみ・町割と屋敷割・所有者名）の描画方法を詳しく調査した。

屋敷図・普請図・御茶屋図・役所図・社寺図・学校図などの指図は、特に図像特色として、建物（着色・輪郭のみ・平面・立面・部屋名・文字表記・導線）や庭（着色・築山・飛石・池・道）の描画方法、格子野の種類（ヘラ引き・黒引・無）と間隔（縮尺）、作図法（貼絵図・書絵図）を詳しく調査した。さらに、これらの調査時に、書誌データの整理と参考のために必要な箇所の部分図を、デジタルカメラで写真に撮った。

調査した資料の中には、虫損、汚損、糊離れ、料紙の劣化など著しく状態の悪いものも見られた。調査中、特に、糊離れ（付箋、貼紙、料紙継目、表紙など）を起こしているものがあつた場合は、書誌学的・建築史的見知から元の位置が明らかに断定できるものは、資料の散逸や破損の進行防止の為に無添加の糊で仮止めし、断定できないものは封筒に入れ本紙と一緒に和紙で包むなど、適宜必要最小限の応急処置を施した。その他の症状で閲覧に耐えられない状態のものなどは、和紙で包むなど保護してその旨を表記した。また、断簡となって散在していたものについては、照合可能なものは一つにまとめた。これらの資料については、後の修補を待ちたい。

さらに、今回の調査では、現行の目録作成時は未整理であったと考えられる資料も複数点確認しており、描写内容等が判明したのものもあることを合わせて報告しておく。

有職故実部門

高濱州賀子

有職故実分野の作品自体は、原則的に東京永青文庫または熊本県立美術館に収蔵されているため、当附属図書館には多くは残されていない。

しかし、国文関係資料のうち『源氏物語』や『伊勢物語』などの絵入本や、『蒙古襲来絵詞』などの絵巻類のように、絵画や工芸資料としても貴重なものも少なくない。これら美術的にも評価すべき作品群については、時代判定や作者や様式の同定なども勿論であるが、現状の保存状態の確認のためにも写真撮影によるデータ保存が必要であると思われた。従って写真撮影の許可を財団法人永青文庫にお願いした。本件の撮影許可が下りて以降の調査としては、調書作成と撮影を同時に行えるようになった。また、その調査データと写真データを統合できる「目録調査データベース」のフォーマットをコンピューターにつくり、データを蓄積保存するシステム化を行った。調査カード300件、写真データ90件が終了。

1. 本年度調査した美術工芸分野の主だった資料

- (1) 「細川忠興肖像」(1746年・狩野梅軒筆)、「細川忠興所用錦陣羽織」など、これまで公開されていない優れた作品で、かつ保存状態に問題があるもの。
- (2) 「天草絵図」(江戸時代後期・杉谷雪樵筆)、「義士切腹図」(1899年写)など、絵画作品として貴重なもの。
- (3) 細川重賢(8代)の自筆による書蹟、典籍類は数多い。「細川重賢 御謠本・御仕舞付」、「押華帖」など。
- (4) 細川宗孝(7代)・斉茲(10代)・斉樹(11代)など自筆の書・絵画が多くは未表装のまま収蔵されている。歴代藩主の筆跡資料は多数残っている。
- (5) 貞享3年(1686)から幕末の安政6年(1859)に至る、51通の鞍や鐙などの鑑定折紙がある。永青文庫に現存する実物と照合できる資料である。
- (6) 文化9年(1812)に作成された「御鐙形」見本帳は、細川家伝来の鐙の図案を多数収録したもので、現存作品との照合が可能である。

2. 細川家初代幽斎以来の故実関係資料

- (1) 細川幽斎関係では「故実條々記」「遠笠懸ノ軸」。細川三斎「三斎公御軍書」など。細川忠利の「馬書」は貴重な馬術相伝書である。武家故実に関する史料は数多い。
- (2) 正田分五郎あて豊臣秀次や徳川秀忠らの兵法相伝誓紙が一括して残る。
- (3) 元治元年(1864)長州征伐出陣時の豪華な「旗指物帳」がある。さらに幕府旗本の「鎧・陣羽織・旗印帳」なども貴重な資料。
- (4) 「三斎差物之図」「関ヶ原御陣刀之図」など御家の名物記録など
- (5) 香道関係資料として「十種香之記」「香包紙」など。

3. 幕末関係資料絵画資料

- (1) 「魯西亜人応接図」はロシア使節プチャーチンが幕府に通商を求めて来日したときの応対の様態を絵にしたもの。その応接記録とともにある。

- (2) 「亜墨利加人上陸図」、「蒸気船之図」などの一括資料は、ペリーの浦賀来航に際しての詳細な記録となっている。

文学・文芸部門

森正人・徳岡涼

文学・有職故実関係の典籍類については、2004年度より、国文学研究資料館の文献資料調査として、年に2～3回の集中調査を中心に実施してきた。2009年度も継続してのものである。

調査前に、調査対象のリストアップを図るが、対象典籍に、和紙の付箋に赤のポスターカラーで印を付けたものを挟みながら、外題と典籍に付された番号を抜き書きし架蔵場所も記してゆく。その際、番号順に収納されていない場合は、あるべき場所に戻している。

この作業は、1970年代の国文学研究資料館の文献調査で既に調査済みのものを避ける意味もある。リストアップを元に調査書目台帳を作成し、集中調査に臨む。

集中調査は、附属図書館2階の教員研究室を使用。調査台には和紙を引き、調査が済んだ典籍は、各々、緑のポスターカラーで印を付けた和紙の付箋に取り替える。

フォーマットは、資料館規定の細目カードを使用。「写本・刊本の別」、「外題」(題簽が貼られているか・打付書かの別)(書き題簽か刷り題簽かの別)(題簽の位置が左肩か・中央かの別)、(題簽が単辺か双辺かの別)、「内題」(巻首題・見返し題・扉題・序跋題・目録題の中から転記)、「柱」、「整理番号」(整理番号については、一つの番号に複数典籍を含む場合は枝番号をふり、付箋にその旨を記し挟む)、「刊写年次」(整版・古活字・木活・活版)、「残存状況」、「保存状態」(良・並・不良(破・汚・疲・虫)補修有りか否か)、「箱・帙・袋等の数と材質」、「蔵書印」、「序跋・年時・序跋者」、「編著者等」 「表紙」(原装か否か・色・文様)、「装訂」(巻物・折り本・列帖装・袋綴・仮とじなど)、「料紙」、「寸法」、「匡郭」、「丁数」、「本文・序・跋の行数」、「絵」(濃彩・淡彩・白描・丹緑・色刷・墨印)、「書き入れの有無・別筆か否か」、「用字」、「刊記・奥書・識語・極札・箱書・広告など」の項目である。

虫損などにより状態の良くない典籍類については、中性紙の封筒か箱に移し替える作業も行っている。

以下が、今年度の調査日程と参加者である。

*第16回 永青文庫和漢書集中調査 国文学研究資料館との連携による

調査点数192点(家譜・8 有職故実・105 芸能・47 文学・32)

8月6日(木)から7日(金)、10日(月)から12日(水)

参加者・森、徳岡、堀畑正臣(熊本大学・教育)、屋敷信晴(熊本大学・文)、山田尚子(熊本大学・非)、鈴木元(熊本県立大学・文)、米谷隆史(同)、川平敏文(同)、小川剛生(慶応大学・文)

*第17回 永青文庫和漢書集中調査 国文学研究資料館との連携による

調査点数 156点(家譜系図・78 有職故実・1 芸能・76 文学・1)

11月30日(月)から12月4日(金)

参加者・森、徳岡、堀畑正臣(熊本大学・教育)、山田尚子(熊本大学・非)、鈴木元(熊

本県立大学・文)、米谷隆史(同)、川平敏文(同)

*第18回 永青文庫和漢書集中調査 3月1日(月)から3月5日(金) 森・徳岡・小川剛生
(慶応大学・文) 調査点数 101点

*和漢書再調査 約100点 森・徳岡

昭和50年代に調査された藩主手沢資料(国文学関係)ものを、再調査し、枝番号をふり、
整理を行う。箱書きなども全て調査した。また、県指定のものは配架場所が異なるので、
その旨も記録した。

*歴史班と合同して、藩主手沢、歌稿・詩稿・短冊・色紙類調査。約1000点 徳岡

歴史班の調査を元に更に詳しく調査した。国文学研究資料館のCカードに、「包紙上書」
「書き出し」、「寸法(全点の寸法)」、「紙質」(文様・彩色等)、「状態」を記し全点調査し
た。

なお、平行してこれまで15回にわたる調査のカード(約3500枚)の整理(ジャンル毎に分
類)を行っている。

4. 講演会の記録

1) 熊本大学文学部附属永青文庫研究センター設立記念講演会

平成21年5月30日

センター長挨拶

甲元眞之

ただいま紹介に預かりました甲元眞之です。今から約40年前、熊本にありました細川家の北
岡の倉庫で膨大な細川家文書が発見されました。当時の細川家の御当主であった細川護貞氏と
熊本大学教授松本雅明氏との深い繋がりが縁で、多くの細川家史料が1964年に熊本大学図書
館に寄託され、今日に至っています。これら資史料が熊本大学に寄託された後、森田誠一先生
を中心として基礎的な目録が作成されましたが、なにせその数が膨大なために、これまでは部
分的な研究がなされてきたに過ぎません。一部は東京大学史料編纂所により『細川家史料』と
して刊行され、そのほか『出水叢書』全12巻、『細川家永青文庫叢刊』全14巻などに収録され
た僅かなものが公表されているだけでした。熊本大学の歴史学科を中心として6年前から大学
の拠点形成研究助成金や文部科学省の科学研究費の助成をうけて細川家文書に取り組み、住民
の褒章記録である『町在』の索引を作り、藩政の行政記録の解析に当たってまいりました。

こうした折、熊本県文化課を通して肥後銀行からの基金をもとに、細川家文書の目録作りを
依頼されましたのを機会に、文学部附属永青文庫研究センターを設立して細川家史料の本格
的な研究を進展させることとなりました。今年ちょうど文学部が創設されて30年の節目にあ
たります。文学部創設30年を機に文学部が新たな方向性を打ち出すチャンスと重なりました。

膨大な細川家文書もその特色を挙げるとすると以下の3点に絞ることが可能であると思量さ
れます。それは藩の事業を行うときの意思決定の行政プロセスが事細かに記されていること。
絵地図・指図(建物のプラン)が寛永期から幕末まで完全に残されていること、そして大名家
としては異例なほど中世以来の武家・公家文化の伝統が色濃く反映されていることです。

最初の点に関しましては熊本大学の日本史学の研究者のこれまでの地道な調査研究により明
らかにされてきました。組織的には郡と村の中間に位置する「手永」を単位として行う事業が
どのような経緯を経て実行されたかという点が、詳細にわたって記録されています。また他藩
では総庄屋は代々の家により継承されてきましたが、細川藩では有能な人材を引き立ててこれ
に当たらせ、しかも能力に応じて勤務地を移動させることが行われていました。これなどは近
代国家の官僚組織の「先取り」とも見なすことができます。さらに能力を有する農民には武士
の身分を与え、長崎や江戸に留学させ、藩の官僚として取り立てて一定の職務を担わせたりし
ています。こうした遣り方のなかから明治政府を支えた井上毅などの人材が輩出する所となり
ました。いわば行政の実質的な担い手を身分の上下を問わず引き立てている点は、近代のさき
がけとも言えるでしょう。

絵地図・指図に関しましては他藩の追従を許さぬほど貴重な資料が保存されています。江戸
の上屋敷などは寛永の頃から幕末までにわたり、増改築するごとに彩色された建物の配置図が

あります。また熊本城内部や熊本城下の花畑屋敷など細川家関係建物群ばかりで無く、藩内の各所の地図類も含まれます。こうした絵地図・指図が完全に保存されているのは細川家だけです。これらは従来一部の研究者が注目していたにすぎませんが、公表されますとその重要性が認識され重要文化財以上の指定を受けることは必定な資料群といえます。

細川家の基礎固めをしたのはご承知の通り細川幽齋ですが、幽齋は室町時代の武家や公家の文化やしきたりを一手に継承していた人物でした。和歌をはじめとして様々な文芸を体得していたばかりでなく、室町時代の行政的な文書形式をも会得していた存在で、江戸時代初期の行政的な命令の書き方は『室町家式』として幽齋を通して徳川に伝えられました。戦国時代は各地の領主が離合集散を繰り返しながら勢力争いを行っていましたので、彼らに共通する作法として室町時代の武家や公家のそれが広く取り入れられました。領主同志の同盟を結ぶときや、領主が家臣団との盟約を確認するときには、「式三献」といって大中小3種類のカワラケで酒を酌み交わすことが行われましたが、このときに使用された土器が中世の山城では多数発見されています。「式三献」とは今日でも結婚式での「三々九度」や「身内の固め」の儀式に伝えられています。江戸時代の武家の作法が確立するのは元禄時代頃であり、それ以前は室町時代の様々な様式が広く受け入れられていたので、幽齋をはじめとする細川家の文化伝統は中世から近世への仲立ちをする際に重要な役割を果たすこととなりました。

このようにみえますと、細川家の歴史的役割は中世から近世への橋渡し、近代行政組織の先駆けを推進していたともいえるでしょう。熊本大学にはこうした貴重な記録類である資料群が膨大に寄託されています。いわば細川家700年の歴史が埋もれている状態にあるといっても過言ではないでしょう。これら資料群の基礎的研究の第1段として廃藩置県以前の細川家資料群の目録作りと、そのうちとりわけ貴重な資料の翻刻出版を行い、永青文庫から熊本大学に寄託された文書群の重要性を明らかにするために、熊本大学文学部では附属の「永青文庫研究センター」をこの4月に発足させました。

当面は5年間を目処として基礎研究に邁進しますが、資料群に示される細川家700年の歴史的役割をこれだけの期間で明らかにすることは時間的にみて極めて不十分であり、今後10年、20年、あるいは100年、200年と研究を持続して解明にあたる必要がございます。熊本大学がこの事業の継続に冷淡になった場合、どうぞご来場の皆様の叱咤激励をお願いして、熊本大学附属永青文庫研究センター長としての挨拶に代えさせていただきます。御清聴ありがとうございました。

2) 熊本大学文学部附属永青文庫研究センター設立記念講演会

平成21年5月30日

熊本大学寄託永青文庫資料の構成と歴史的位 置 (要旨)

稲葉継陽

はじめに

熊本大学附属図書館寄託永青文庫資料とは、1964年に細川家から寄託された史資料群であり、寄託契約書によれば、総数は4万3,000点以上に及びます。この講演では、史資料群の構成・内容及び本学寄託移管までの経緯を検討し、その歴史的位 置を考察します。

I 熊本大学附属図書館寄託 永青文庫史資料群 概要私案

私案によれば、史資料群の構成は以下のように理解されます。

1、藩主御手元史資料群

- a 中世細川家文書 b 細川忠興・忠利・光尚往復書状 c 御印物 (初期藩主裁可文書)
- d 家臣団起請書類 e 近世藩主・幕藩関係文書 f 歴代家譜類
- g 連枝書状等 h 沢庵書状群 i 細川重賢関係史資料 j 絵巻物、歴代藩主等御筆・絵画、和歌等

2、藩主御手元書籍群

- a 和書 (細川幽齋著作等を含む) b 漢籍

3、藩政関係史料群

- a 藩政諸部局記録類 b 藩政諸部局文書類 c 藩政公式編纂記録類

4、絵図・指図類

- a 国絵図 b 領内等地図 (熊本城下図を含む) c 建築図 d 城郭図
- e その他

5、未整理文書類

6、近代史資料群

以上のうち、1・2・6は狭義の細川家に蓄積された「藩侯の史資料群」、2～5は近世の政治単位としての大名家に蓄積された「藩庁の史資料群」とでも呼ぶべきものです。

II 近世大名細川家論—成立論と文化論と—

上記のうち1及び2の史資料を用いて究明することが可能と思われる、いくつかの研究課題を示します。

織田信長に取り立てられた細川藤孝 (幽齋) の存在形態を通じて、本領安堵系 (旧族) 大名とは異なる取り立て大名の歴史的性質を検討することができ、また、武士領主の団体としての近世大名家の特質や初期幕藩関係についても研究を深めることができます (上記1 - ade)。幽齋による、古典文学享受 (古今集・源氏物語・伊勢物語) の注釈等を体系的に集成しようとした初の試みについても、具体的な研究が可能で す (上記2の資料)。

上記の資料1 - h j部分には、諸芸の家元や学者の家レベルの資料が伝来し、トップレベ

ルの和歌・能・茶道・書・武家故実と、それらを幽齋に集約させた人間関係を示すものが多く含まれ、中世文化を一身に体現して近世へと引き継いだ幽齋の活動が検討できます。

さらに、歴代家譜の編纂、中世和泉守護細川家伝来文書の入手、家史の編纂過程の検討を通じて、大名家の由緒の形成過程を具体的に復元することが可能です（上記1-f）。

このように、上記の史資料1・2の部分によって、近世大名家成立過程を研究し、日本文化史上のキー・パーソンたる細川幽齋を学際的に研究することが可能となります。

Ⅲ 藩政成立・展開論

次に2～5の史資料を用いて究明可能な研究課題を示します。

初期藩主の「御印物」全57巻（1-c）は、奉行その他の家臣からの上申書・政策原案等を藩主が決裁した文書の集成であり、初期藩政の特徴と変容過程を具体的に研究可能です。

しかし18世紀中葉、「御印物」が消滅し、藩庁では部局制の整備と各部局の本格的「行政組織」化が進められ、機密間（総務部局）、郡方（地方行政部局）、選挙方（人事部局）、刑法方（法制部局）等の行政資料が体系的分析を可能とする密度で伝来することになります（3-a b）。

このうち特に、郡方の行政記録たる「覚帳」は、熊本藩の地域行政単位たる「手永」と惣庄屋による地域政策の立案、それを起案書とした稟議による政策決定、手永における実施、百姓出身の行政集団の形成、手永における独自財産の形成といった諸事実を示します。

また、選挙方の「町在」は、惣庄屋の業績評価（転勤制）や社会諸階層の公益活動評価の様相を示します。

これらは、藩政をその成立期から成熟期を通じて総体的に検討し得る歴史資料群として稀有のものであります。

Ⅳ 藩政資料の県への移管と近代行政

最後に、3～5の藩庁文書の伝来までの経緯を紹介して問題提起します。

これら資料群のうちの多くは、廃藩置県によっていったん県に引き継がれ、その後、数次にわたって細川家の蔵に戻され、熊本大学への寄託に至りました。郡方の行政記録「覚帳」、行政マニュアル「仕法帳」、手永ごとの「間数御改帳」「人畜帳」、各「手永分度記」、寺社関係調査帳等といった、郡方主要帳簿の多くに県印が捺されています。このことは、日本の近代行政が藩行政の主要資料に依拠して出発したことを示していると思われれます。

おわりに—本センターの事業構想—

以上の史資料のあり方を踏まえて本センターが計画している事業は、以下の通りです。

- (1) 総目録の作成
- (2) 出版事業
- (3) 研究成果を反映した文化事業
- (4) 学際的新研究領域の組織に関する事業

3) 熊本大学文学部附属永青文庫研究センター設立記念講演会

平成21年5月30日

熊本藩の地域行政と日本近代（要旨）

吉村豊雄

I 日本近世社会を見る視点—「二つの二割」

一八世紀中期以降、明治初年に至る一九世紀段階の領主制・領主政治は、「二つの二割」に象徴されている。「二つの二割」とは、領内生産総額に占める領主取り分（税収）の割合であり、家臣（知行取）が役人となる割合である。全体の二割程度の家臣で担う政治行政には、おのずと限界があり、また藩主・家臣団の生活費・人件費を中心とした領主財政には、社会に向けた直接経費は驚くほど少ない。同時に、領主財政は二割を超えた税収＝年貢を志向せず、領内総生産額の八割を農村・百姓側に留保させ、本年貢以外の雑税部分を地方財源に移譲していく。

II 幕末日本社会の到達点

こうした領主政治の変化と社会の公共業務拡大のなかで、村の成り立ちを保障し、地方の公共業務を担う地方組織として、郡と村の中間行政区画たる「手永」の役割が大きく顕現し、藩行財政改革＝行政業務のスリム化とあいまった行政権限・財源の地方移譲を通じて手永の広域自治団体化が進む。藩行政の主要役割は、手永を基盤にした政策提案の稟議制に基づく許認可と、住民に対する人事・評価・褒賞に特化し、これに対応した行政記録として「覚帳」「町在」を整備せしめる。「覚帳」とは、熊本藩の民政担当部局の記録であるが、「覚帳」をみると、一九世紀段階の民政・地方行政に関わる主要な政策形成が手永を基盤とした、百姓側からの上申事案の稟議制的承認を通じてなされる行政段階にあることを実感する。従来の研究史が全く想定していなかった行政段階に到達している。

このように、手永は、行政権限と地域運営財源を有し、管内の村々を組織して民政・地方行政を担い、藩当局との折衝により村々の要求・願筋の政策実現に向けて動く広域自治団体としての役割を強める。ところが、幕末期に高度発達をみた手永制は、維新変革の過程で一気に解体に向う。

III 維新変革の基礎

藩政府は、維新政権の改革圧力のもとで、本年貢と分離され、手永の地方運営財源となっていた「雑税」を裁量下に置き、雑税免除の形で住民への大幅減税を行いつつ、手永の財源と高度化していた手永の民政・地方行政力を藩政府のもとに集中した。「藩」＝藩制の行政分担組織として「郡」＝郡制が整備され、藩制＝郡制のもとに行政区域化した「郷」（手永）と村組（里）が系列化された、「近代地方行政制度」が急速に組成される。

永青文庫の文学資料 (要旨)

森 正人

はじめに

永青文庫の日本文学関係資料は、細川幽斎(1534~1610)の収集・書写した和歌や物語類を核として、歴代藩主とその家族の手もとに置かれていたもの、細川家家臣あるいは藩校時習館の旧蔵書なども加わり、長期にわたり重層的に形成されてきているため、歴大かつ多様である。これらのうち幽斎関係については『北岡文庫蔵書解説目録-細川幽斎関係文学書-』(熊本大学法文学部国文学研究室 1961年)等に行き届いた紹介があって、よく知られ、特に貴重な資料は『細川家永青文庫叢刊』全14巻(汲古書院)に影印本として刊行されて、広く活用されている。そこで、ここではそれら貴重かつ著名な資料について、改めて紹介したりその意義を説くことはせず、永青文庫資料にふれつつ物語史を展望し、また物語史という視点から永青文庫資料の構成と性格について述べようとするものである。

物語史への視点

日本文学史は、一般的には作品がいつどのようにして生まれたか、すなわち創造の営みを時系列的に整理するという方法で説かれる。それは言い換えれば、作者中心主義の歴史である。しかし、作品はそれが成立して歴史的使命を終えるわけではない。作品は読者に読み継がれるかぎり、その時代の文学として役割を果たし続ける。21世紀において、村上春樹とともに夏目漱石が、また源氏物語が同時に読まれているという事実思いをいたすなら、年表風の従来の文学史がいかに文学を単純化し、一面化してきたかに気づく。私たちは、多くの作品が読者の支持を失って消滅したことを知っている。たとえば、正治2(1200)年頃成立の無名草子に名前のある「作り物語」(歌物語、歴史物語を除く)作品は29編、うち完全なかたちで伝わるもの7編、一部欠落2編、改作1編、散逸作品は19編にのぼる。今日に残る文学資料は、読者の取捨選択の結果にはかならない。こうして、創造から享受へと、視点を転換させることが必要である。

永青文庫所蔵の物語作品

永青文庫の物語資料を見渡すと、細川幽斎の時代およびそれ以前に書写された本、江戸時代前期以降に書写されまたは版本として刊行された本とに大別される。後者は、うつほ物語、落窪物語、栄花物語、とりかへばや物語等で、栄花物語を除き、これらは他にも古写本の伝存は知られない。一方、伊勢物語、大和物語、源氏物語、狭衣物語はいずれも幽斎書写あるいは幽斎奥書の本があり、ことに伊勢物語は幽斎時代あるいはそれ以前の古写本6点の多きに及ぶ。源氏物語は、幽斎自筆細注書き入れ本のほか、幽斎をはじめその子忠興など周辺の人々が分担して書写した(寄合書きという)本が2組、やや時代が降り、寛永の三筆の一人・松花堂昭乗(1584~1639)筆、源氏物語の代表的な注釈書『湖月抄』の著者・北村季吟(1624~1705)筆

などもそなわる。

これらに対して、たとえば寝覚物語、浜松中納言物語、堤中納言物語などは文学史上著名な作品でありながら、永青文庫には所蔵をみない。これらもまた、江戸時代以降の写本しか伝わらず、しかも版本として流布することはなかったからである。こうした様相は、現代における物語の文学史と、江戸時代以前の享受のされ方との間に大きな懸隔のあることを示す。

物語作品享受の二相

物語は「女の御心をやるもの」(三宝絵・序)として、女性読者は物語の主人公に同化しながら読みふけた。源氏物語にも、継子として迫害を受けるも高貴な男君と結ばれて幸いを得る住吉物語の女君に我が身を重ね合わせて熱中する姫君が登場する。住吉物語は、鎌倉時代に大幅な改作が行われ、以降も絵巻や絵本の形であるいは版本として江戸時代まで広く長く享受された。住吉物語のほかにも、継子物語は多種多数の作品が流布していた。女性の娯楽と教養のために供給され続けたのである。

一方、源氏物語は、平安時代末期から歌学と結んで古典として扱われるようになる。源氏物語の地位を押し上げたのは、藤原俊成・定家の父子が礎を築いた御子左家(鎌倉時代に、二条、冷泉、京極の三家に分かれる)の歌学であった。俊成は、建久4(1193)年頃の六百番歌合に歌の優劣の判定を行い、源氏物語を踏まえた歌を理解しなかった歌人に対して「源氏見ざる歌詠みは遺恨のことなり」と批判し、定家は源氏物語の証本(拠り所とする本)を作成し、注釈書「奥入」を著した。また、定家に歌を学んだ順徳天皇(1197~1242)が筆を執った歌学書・八雲御抄には「学書」として物語の項に伊勢物語、大和物語、源氏物語の三書を挙げ「この外の物語はあながちに最要にあらず」(漢文を読みくだす)と記している。この時期、物語のなかで古典として扱われるべきは、まずこの三書であり、これに加えるとすれば狭衣物語であった。

幽斎本とその他

永青文庫には、継子物語としては、落窪物語の版本と「いはや物語」が蔵される。「いはや物語」は寛文(1662~1672年)頃の豪華絵巻(細川家への輿入れの際にもたらされたのであろうか)で、いずれも幽斎とはかかわらない。あれほど読まれた住吉物語はない。幽斎が住吉物語を読まなかったとまでは断じたいが、源氏物語や狭衣物語などとともに手もとに置く本ではなかったことは明らかである。

幽斎が書写し、あるいは人に書写させて奥書を加えた本は、歌学(和学といってもよい)の正統を継承する立場から選別されている。選別されたそれらが幽斎にとっての学問の対象であり、資料であった。

平成21年11月1日

御花畑屋敷（肥後藩国許屋敷）について（要旨）

北野 隆

本年度の「永青文庫セミナー」は、御花畑屋敷（肥後藩国許屋敷）について、絵図の展示を熊本大学図書館、講演を放送大学熊本学習センターでおこなった。

御花畑屋敷は、熊本城と坪井川を隔てた南側に位置していた。現在の花畑公園がその一部に当たる。御花畑屋敷は、加藤清正代の慶長15年（1610）に清正の別荘的な御茶屋として造られた。当時は「四木神社」（代継神社）が存在していたが、神社を移して「色々な花を植え、様々な風流を尽くした庭園」を造り、「花畑」と名付けたと言う。

寛永9年（1632）には、豊前より細川忠利が入国した。忠利は最初、熊本城の本丸御殿を住居にするが、慶長期に建てられた本丸御殿は寛永期の住居としては「万事に不便」で、寛永10年には本丸御殿の改造を行った。しかし、本丸御殿の改造はうまくいかず、寛永11年より花畑屋敷の普請・作事を大規模に行い、寛永13年6月に完成した。これ以後、花畑屋敷をもって肥後藩の国許屋敷とした。

永青文庫には、多くの「御花畑屋敷」の絵図が蔵されている。今回はその中より「御花畑御絵図」（図1）の指図（建築平面図）と「御花畑屋敷」を南北方向より見た景観図（図2）を展示した。

この指図によると、「御花畑屋敷」の総坪は、147651坪という広大な敷地であった。

この敷地の北部分に御殿群、南部分に泉水をそなえた回遊式庭園が設けられていた。

御殿は御広間・御書院（佐野之御間）・御座敷（中柱之御間）・御敷舞台・歌仙之御間・御居間（陽春之御間）・御寝間（御地震之御間）が連なり、その東側に御裏御殿が続いていた。これらの中心的な御殿の南側には広大な庭園になり、「陽春庭」と名付けられていた。この指図の年代は、「御敷舞台・歌仙之御間」などが史料によると、元禄8年（1695）に増築されているから、それ以後の様子であり、江戸時代中頃を表していると思われる。忠利が入国して寛永期に普請・作事を行ったのは、御広間・御書院（佐野之御間）・御座敷（中柱之御間）の建築を考えられ、御敷舞台・歌仙之御間・御居間（陽春之御間）・御寝間（御地震之御間）と泉水を備えた広大な庭園は、江戸時代中頃の増築と考えられる。

現在、当時の「御花畑屋敷」庭園の南西角が「花畑公園」として残されている。御殿跡や泉水跡は商業ビルや電車通りになって、当時の面影はない。「花畑公園」は「肥後藩国許屋敷」の庭園の遺構として貴重なものである。

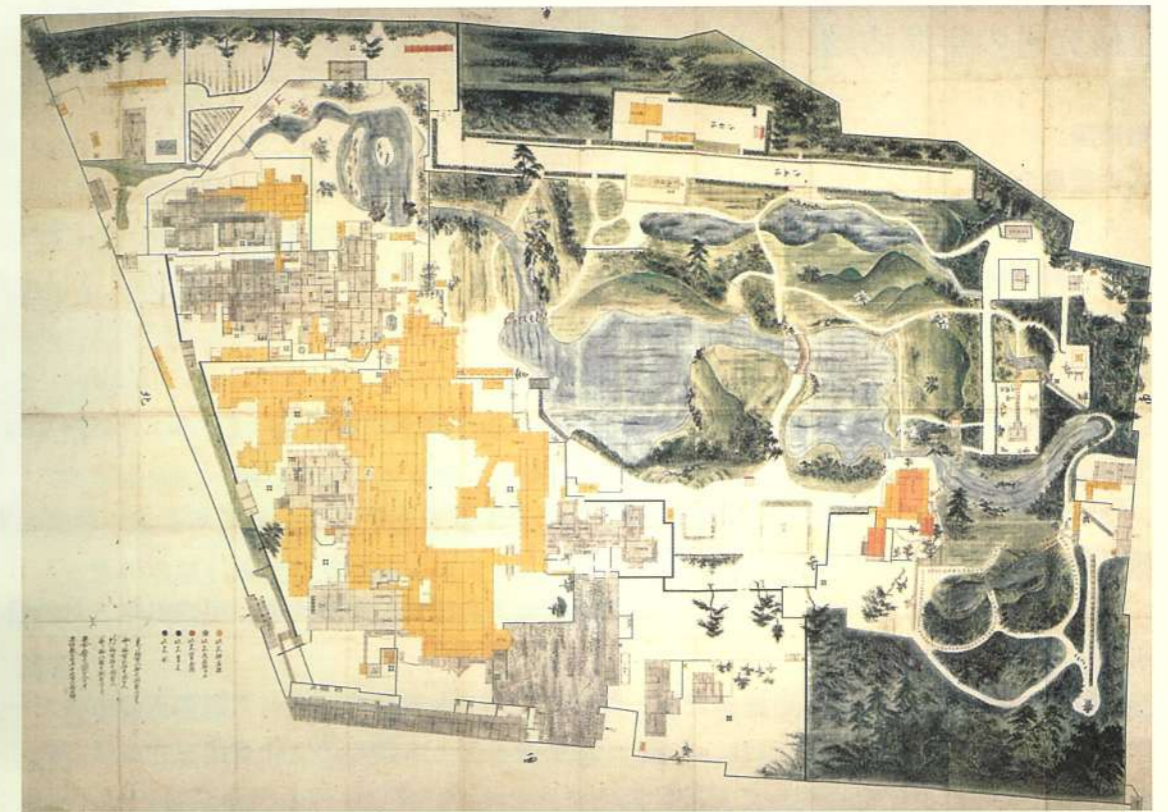


図1 「御花畑御絵図」



図2 「陽春庭中之図」

4. 研究員の年間活動

稲葉継陽

各種委員会

人吉城調査検討委員会委員、佐敷城調査検討委員会委員、陣の内館調査検討委員会委員、宇土城調査検討委員会委員、甲佐町史編纂委員会委員、西原村史編纂委員会委員、荒尾市史編纂委員会委員

講演会

「熊本大学寄託永青文庫資料の構成と歴史的位置」永青文庫研究センター設立記念講演、平成21年5月30日、主催：熊本大学文学部

「熊本大学寄託永青文庫資料の構成と歴史的位置」熊本大学イブニングセミナー講演、平成21年6月4日、主催：熊本大学文学部

「伝統日本の民衆運動と地域社会」歴史学研究会大会報告、中央大学、平成21年5月23日、主催：歴史学研究会

「新しい加藤清正像と本妙寺歴史資料—豊臣取り立て大名加藤清正と人間清正のあいだ—」熊本・本妙寺、平成21年5月31日、主催：「加藤清正公と本妙寺の文化遺産を守る会」

「日本社会の近世化をめぐる」近世史サマーセミナー講演、平成21年7月19日、主催：近世史サマーセミナー実行委員会主催

「戦国時代の相良氏」「歴史回廊たらぎ」講演、多良木町役場、平成22年1月28日、主催：多良木町教育委員会

「戦国時代の熊本と隈本城」熊本市役所、平成22年3月23日、主催：熊本市歴史資料室

内山幹生

論文

「蝗害と鯨油仕法」『年報熊本近世史』19・20号、PP. 12-19、熊本近世史の会、平成21年4月

「宇城市アーカイブスと小田家文書『河江旧記』」PP. 9-24、宇城市教育委員会、平成22年3月

「第一次長州征討にみる熊本藩の兵站～民間人が担った兵站活動の事例」『熊本史学』92号、PP. 59-83、平成22年3月

講演会

「第一次長州征討にみる熊本藩の兵站～民間人が担った兵站と諜報の事例」熊本県立図書館、平成21年6月13日、主催：熊本近世史の会

「明治新政府の陸海軍士官養成機関について」福岡市西区市民センター、平成21年6月28日、主催：福岡市教育委員会

「近代日本最初の国軍組織・御親兵について」福岡市西区市民センター、平成21年7月12日、主催：福岡市教育委員会

「志摩地域の支配機構と生活」福岡県志摩町歴史資料館、平成21年8月1日、主催：志摩町役場企画課

川口恭子

各種委員会委員

熊本市文化財保護委員会委員

講演会

「永青文庫に現存する細川重賢関係史料」県立美術館、平成21年7月25日、主催：熊本県立美術館

「現存する旧藩時代の行政文書について」熊本テルサ、平成21年10月2日、主催：熊本県「殿様の俳句—細川重賢公と由婦君」第14回草枕国際俳句大会、熊本市総合体育館・青年会館、平成21年11月14日、主催：「草枕」国際俳句大会実行委員会

「女性の手紙」八代市立未来の森ミュージアム、平成22年2月27日、主催：八代市未来の森ミュージアム

講座

「古文書学講座」ビブレス熊日開館、月2回、主催：熊本城400年と熊本ルネッサンス県民運動

「古文書初級講座・古文書を楽しむ」NHKカルチャー熊本教室、月2回、主催：NHK熊本エッセイ

熊本日日新聞『ちょい得歴史余話』「細川家の女性—光寿院の生涯」平成21年7月27日、「細川忠興公の妹—浄勝院の生涯」、8月31日、「ガラシャ夫人の形見」10月19日、「四女、生家の細川家に金貸し付け」11月30日、「保寿院、遺骨のみが熊本に」12月21日、「早世した細川家の奥方」平成22年2月1日

北野 隆

各種委員会委員

熊本市文化財保護審議会委員、大分市文化財保護審議会委員長、人吉城整備検討委員会委員、岡城整備検討委員会委員、宇土城整備検討委員会委員、臼杵城整備検討委員会委員、勝尾城整備検討委員会委員、熊本城復元検討委員会委員

講演会

「歴史の宝 熊本城」平成21年5月17日、熊本県立図書館、主催：放送大学熊本学習センター

「人吉・球磨地方の社寺建築について」平成21年7月25日、人吉カルチャーパレス、主催：熊本日日新聞社

「木造三階建のある歴史的温泉街」平成21年9月9日、日奈久温泉金波楼、主催：日奈久開湯600年祭実行委員会

「熊本城」平成21年9月11日、熊本大学工学部百周年記念館、主催：熊本大学

「御花畑屋敷（肥後藩国許屋敷）について」平成21年10月31日、放送大学熊本学習セン

ター、主催：熊本大学付属図書館

甲元真之

各種委員会委員

熊本県文化財保護審議会委員、熊本市文化財保護委員会委員、文化庁「発掘の調査手引き」検討委員会委員、西南戦争遺跡調査検討委員会会長、陣の内館調査検討委員会委員長、宇土市馬門石関係遺跡調査活用委員会委員長

著書

『東アジア先史学・考古学論究』慶友社、467PP. 平成21年
『青驪 終』94PP. 平成21年

論文

「浜堤の形成と考古学資料」『南の縄文・地域文化論考』上巻、PP. 17-25、南九州縄文研究会、平成21年12月

「東北アジア先史漁撈民と農耕」『韓・日新石器時代の漁撈と海洋文化』pp. 47-76、木浦大学校博物館、平成21年

講演会

「東アジアの先史漁撈民と農耕」韓国木浦大学校博物館、平成21年7月、主催：韓日新石器時代研究会

「倭と韓」鳥取県埋蔵文化財センター第10回弥生シンポジウム、平成21年9月、主催：鳥取県埋蔵文化財センター

高濱州賀子

各種委員会委員

熊本市文化財保護委員会委員、大分市美術館収集委員、崇城大学非常勤講師

エッセイ

熊本日日新聞『ちょい得歴史余話』「実は俗っぽかった？ 沢庵和尚」平成21年7月6日、「謎深い沢庵和尚の信念」8月17日、「リアルに描かれた細川重賢」9月28日、「センゴクと細川藤孝」11月9日、「鎧の旗指物」12月7日、「イケメン僧侶の酷評」平成22年1月18日、「男女逆転させた漫画『大奥』」2月15日

書評と紹介

第31回熊日出版文化賞「新宇土市史」宇土の今昔 百ものがたり」熊本日日新聞 平成22年2月21日

徳岡 涼

教育活動

熊本公徳会カルチャーセンター講師、熊本大学教育学部非常勤講師 熊本大学教養教育実施機構非常勤講師、熊本県立大学文学部非常勤講師

論文

「一条天皇御製歌と『源氏物語』について」『熊本大学国語国文研究』第45号、PP. 1-15 平成22年2月

エッセイ

「源氏物語点描 (46) 紺丹緑紫 その2」『阿蘇』No. 924 平成21年4月
「源氏物語点描 (47) クローズ・アップ」『阿蘇』No. 925 平成21年5月
「源氏物語点描 (48) 撫子の花」『阿蘇』No. 926 平成21年6月
「源氏物語点描 (49) ないがしろにうつ碁」『阿蘇』No. 927 平成21年7月
「源氏物語点描 (50) 殿閣微涼を生ず」『阿蘇』No. 928 平成21年8月
「源氏物語点描 (51) 別れの小櫛と長恨歌」『阿蘇』No. 929 平成21年9月
熊本日日新聞『ちょい得、歴史余話』「源氏物語に肥後の“つはもの”」平成21年8月3日、「受領階級の娘たちと文学」9月8日、「定子の短命と彰子の長命」10月26日、「『蜻蛉日記』と『更級日記』、12月7日、「源氏物語に書かれた実名」、平成22年1月18日、「母の“格差”子の出世にも影響」2月8日、「『若菜下』の蹴鞠に駆られて」2月15日

研究余滴

「研究余滴 細川家藩主の教養」『上智大学国文学会報』P. 16、平成21年2月

講演会

『源氏物語』の「いろ」と「ことば」八代ハーモニーホール、主催：熊本県高等学校教育研究会図書部・熊本県高等学校文化連盟図書部

長井 勲

各種委員会

美里町文化財保護委員会委員長、熊本県地域おこしマイスター、熊本県ふるさと水と土基金指導員、国土交通省子供の水辺協議会委員

講演会

「近世後期の農業用水 農業基盤の整備・展開とその意義」美里町中央公民館ホール、平成22年1月22日、主催：熊本県文化財保護協会

藤本豊治

学会発表

「江戸初期の武家屋敷に関する研究—萩城下の福原家の住宅について」平成21年8月28日、日本建築学会大会

森 正人

著書

『源氏物語とくものけ』熊本日日新聞社、60PP. 平成21年

論文

「龍蛇をめぐる伝承文学」『台湾日本語文学報』第26号、PP. 1-19、平成21年

「説話の時代」『平安文学史論考』PP. 417-437、武蔵野書院、平成21年
「今昔物語集の終結」『国文学解釈と鑑賞』第75巻第3号、PP. 119-126、平成22年

書評と紹介

「今野達説話文学論集刊行会編『今野達文学論集』」『説話文学研究』第44号、PP. 182-184、平成21年

「安倍素子著『うつほ物語の成立と絵解の研究』」『国語国文学研究』第45号、PP. 104-106、平成22年

講演会

「永青文庫の文学資料」熊本大学イブニングセミナー、東京リエゾン・オフィス、主催：熊本大学、平成21年6月4日

「羅生門と杜子春」宇土高校フリープログラム、主催：宇土高校、平成21年7月7日

「檜垣の姫説話と熊本」熊本市歴史講座、主催：熊本市、平成21年7月23日

「近年の国語学・国文学研究の動向-近年の説話集研究の動向」、教員免許状更新講習、主催：熊本大学、平成21年8月8日

「永青文庫資料から見る物語史」、熊本大学ホームカミングデイ、主催：熊本大学、平成21年11月1日

「龍蛇をめぐる伝承文学」台湾淡江大学、主催：台湾日本語文学会、平成21年1月19日

「文学の鏡にうつるもの-夏目漱石から村上春樹まで-」主催：台湾中国文化大学、平成21年12月21日

「羽衣伝説の変奏-平安朝物語と近代小説を読む-」放送大学熊本学習センター、主催：放送大学熊本学習センター、平成21年11月22日

吉村豊雄

論文

「藩政改革像の再構築」『歴史評論』717号、PP. 5-20、平成22年1月

「近代への行政的基点としての宝暦-安永期」『熊本大学文学部論叢』101号、PP. 157-178、平成22年3月

「江戸社会に生まれた『日本の近代』」『越境する精神と学際的思考』PP. 1-49、熊本大学文学部、平成22年3月

「中世末・近世における八代妙見祭礼の歴史的展開」『八代妙見祭礼』PP. 159-178、八代市教育委員会、平成22年3月

「小西行長と関ヶ原合戦・加藤清正の宇土城攻め」『再検証・小西行長』PP. 1-40、宇土市教育委員会、平成22年3月

講演会

「熊本藩の地域行政と日本近代」永青文庫研究センター設立記念講演、平成21年5月30日、熊本大学百周年記念館、主催：永青文庫研究センター

「通潤橋・通潤用水にみる幕末日本社会到達の形態-永青文庫史料と地域史料の可能性を探る」熊本大学百周年記念館、平成21年11月30日、主催：熊本大学武夫原会

「藩主の座60年 細川綱利の時代」平成21年6月20日、熊本県立美術館、主催：熊本県立美術館

永青文庫研究センター年報

発行日：平成22年3月31日

発行者：永青文庫研究センター

印刷所：シモダ印刷株式会社